様式C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年６月２０日現在

機関番号：３２６８０
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2008～2010
課題番号：２０７２００６８

研究課題名（和文）　古典演劇が語った「歴史」観についての研究
―中世・近世の軍記物演劇―

研究課題名（英文）　Research for the views on “ history ” shown in the works of Japanese classical narrative drama about war that made during the Muromachi and the Edo period.

研究代表者
岩城　賢太郎（IWAGI KENTARO）
武蔵野大学・文学部・日本文学文化学科・講師
研究者番号：４０４４２５０１

研究成果の概要（和文）：近世期版行の浮世草子、草双紙、読本、軍書、雑史等、ジャンルに拘らずに諸文芸中に見える、源平合戦期の武者達に関する記事を摘出・調査し、謡曲や舞曲等の中世演劇との関連や、浄瑠璃や歌舞伎等との比較・分析を行った。その結果、近世演劇作品中に提示される「源平合戦に関する歴史」観が、中世演劇のテキストと直接的、間接的な交渉を経ており、また、近世期の諸文芸中に示された言説とも関連が見出せることを確認した。そして、こうした近世演劇作品中に提示された「源平合戦に関する歴史」観が、明治期の軍記関連の読本等にも一部、引き継がれ、その影響は、近代の国語科教科書の記述等にも及んでいる例があることを確認した。
　今後の研究においては、政治体制側で編纂された史書等には見えない、中世・近世演劇が培った「歴史」観の追跡を継続し、その影響の考察対象を、近代前期の諸メディアにまで拡げる必要があると考えている。

研究成果の概要（英文）：From a collection of novels, picture books and history books published in the Edo period, I choose and inspect the articles related to war and warriors of the Heisi and the Genji in the late Heian period. And I investigate relations the works of No plays made during the Muromachi period and it of Joruri and Kabuki made during the Edo period with the aforesaid articles. As a result, I suggest that Joruri and Kabuki made the war things of the Heisi and the Genji into the libretto with referring to or quoting from the libretto of the No plays.
　And, As Evaluation of the Genji and the Heisi war that presented in the drama works during the Muromachi period and Edo period, it is found that there are also cases such as the impact of the war novels of the Meiji period.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	800，000	240，000	1，040，000
２００９年度	600，000	180，000	780，000
２０１０年度	700，000	210，000	910，000
年度			
年度			
総　計	2，100，000	630，000	2，730，000

研究分野：日本古典文学、日本古典芸能

科研費の分科・細目：人文社会系・人文学・文学・日本文学
キーワード：軍記物語、平家物語、源平盛衰記、伝統芸能、浄瑠璃、能・狂言、源平合戦

１．研究開始当初の背景

『平治物語』『平家物語』『義経記』等の軍記物語・準軍記物語は、現代においても、小説（橋本治「双調平家物語」）、舞台芸術（木下順二「子午線の祀り」）、映画・テレビ（大河ドラマ「義経」）、漫画（北崎拓「秘本義経記 ますらお」）等、我が国の文芸の主要な素材として、享受され続けている。国文学研究誌『国文学 第 47 巻 12 号』は、「平家物語―生まれかわりつづける物語」（2011 年 12 月）という、現代の様々なメディアに取り上げられている『平家物語』について特集を組んでいるが、こうした特集を見ても、軍記物語が、現代においても、なお大きな影響力を持ち、新たな文芸を創出し続けている様が窺える。

こうした現代文芸にあらわれる源義経なり平知盛なりの中世の武将が、例えば、『玉葉』や『吾妻鏡』等の中世の記録・史書に見える人物像とは大きく異なっていることは、今更述べるまでもないことであるが、では、史書とは異なる武士像の淵源はどこに求め得るのか。それは、『平家物語』等の軍記物語の文字テキストにも直結せず、むしろ、軍記物語を典拠としつつ、そこにオリジナリティーを加えて成立した能、幸若舞曲、浄瑠璃等の演劇に求められるのである。こうした古典演劇は「語り物芸能」とも称されるように、現代演劇とは異なり、舞台上の役者なり人形（浄瑠璃太夫）なりが、所作もさることながら、源平時代の合戦譚などを、観客に、「語り聞かせる」点に特色がある。従って、古典演劇の研究には、この語り伝えられるところの、テキスト（台本）の精密な分析が欠かせない。

こうした観点に注目した、まとまった研究として、小林健二氏『中世劇文学の研究―能と幸若舞曲―』（2001 年）や、佐谷眞木人氏『平家物語から浄瑠璃へ―敦盛説話の変容』（2002 年）が挙げられる。しかし例えば、佐谷氏論において、『平家物語』と古浄瑠璃との間に介在する能のテキストの影響が十分には考慮されておらず、鎌倉惠子氏「浄瑠璃と歌舞伎における知盛像の変遷」『芸能の科学 29』（2002 年 3 月）では、先行の浄瑠璃（古浄瑠璃）のテキストの影響を十分には斟酌することなく、『義経千本桜』等の浄瑠璃作品のオリジナリティーが論じられている。古典演劇のテキストの精確な分析には、時代・ジャンルを跨ぐ複数のテキストの分析が必要であり、また、同一作品についても、書写時期や版行時期を違える複数の本を比較・検討し、同一作品内でのテキストの改変の様態を把握することが、欠かせない。

古典演劇の研究は、中世・近世それぞれの文学研究、演劇・芸能研究の分野で進められているものの、各研究分野の成果が相互に反映されているとは言えない状況である。こうした研究状況に鑑み、本研究では、軍記物語研究で進められているテキスト研究の成果等を参酌し、中世・近世の軍記物演劇の分析を行う。

２．研究の目的

本研究は、室町～江戸時代に成立した「語り物」の演劇、即ち能・狂言、幸若舞曲、浄瑠璃（主に江戸時代前期の古浄瑠璃を対象とする）が、軍記物語を素材としつつ、いかなる「歴史」観を形成し、中世・近世人に語り伝えて行ったかを研究する。

本研究の特色・独創性は、政治体制側から捉える歴史ではなく、中世・近世の人々が、演劇作品の中に見出した史実を「生きた歴史」と捉えて、歴史学の分野からのアプローチとは異なり、中世・近世の軍記物演劇に注目して、当時の「歴史」観を追究する点にある。即ち、中世の軍記物語に取材して作品化された古典演劇が、中世・近世の演劇作者や観客の中に、いかなる「歴史」観を培ったのかについて、文学・芸能研究の側からアプローチする。

本研究におけるテキスト分析のポイントは、人物造型はさることながら、作中の「時間」に関する表現への注目である。

例えば、内山美樹子氏「日本演劇における時間―夢幻能と浄瑠璃を中心に」『日本の美 19』（1992 年 12 月）は、近世人にとって、近世の史書『日本王代一覧』等が伝えた歴史よりも、浄瑠璃等の演劇が語り伝えたものが、「歴史」として捉えられていた点に注目しているが、同時に、内山氏は、浄瑠璃の作中時間の設定に、素材となった軍記物語ではなく、先行演劇の能の影響が大きいことを指摘する。

この内山氏論が示唆する能の特徴とは、能は、軍記物語のテキストに取材するが、舞台上に、武将の霊を来世から現世に呼び戻して登場させ、その軍記物語のテキストを、武将自身に語らせるという形式を持っていることである。能では、その歴史事項よりも後日を作中時間として設定し、武将自身の口から、懐古譚として、昔日の合戦の様などが観客に伝えられる。言わば、能は、軍記物語のテキストとは、「時間」を違えることで、武将の霊に、自己の人生を相対化して語らせる。即ちここに、演劇作者による、新たな「歴史」を提示する余地が生まれるのである。観客は、武将自身の口を通して語られるテキストに、

「真実」を見出し、それを「歴史」と見なして行く。

本研究代表者は、こうした古典演劇の特色に注目し、先に、『平家物語』「木曽最期」で著名な源義仲の最期に取材した浄瑠璃作品について、『平家物語』と能のテキストの調査を踏まえ、浄瑠璃のテキストとの比較・分析を行い、「『平家物語』から謡曲、そして古浄瑠璃へ―「木曽最期」を語った古浄瑠璃の様相」『筑波大学平家部会論集』第 12 集（2007 年 3 月）にまとめた。この研究では、近世初期の「木曽最期」を語った浄瑠璃には、『平家物語』のテキストを参照しつつも、能のテキストが優先して採り入れられる作品の多いことが明らかとなった。また一方で、注目されたのは、浄瑠璃は、単に、古典演劇側の独自の、新たな「歴史」を語っているのではなく、当時の『平家物語』の読まれ方を示す評判記や、『日本百将伝抄』等の史書の記述等との連絡をはかりながら、「語り」のテキストを生成しているという点である。

即ち、古典演劇は、当時の軍記物語評判記や巷間の名将伝等の史書の伝える「歴史」との連絡をはかりながら、そこに、演劇の「語り」の方法を通し、オリジナリティーを加えるからこそ、単なる荒唐無稽な「歴史」とはならず、人々に受け容れられて行くのであろう。

本研究では、軍記物演劇が繰り返し取材している、「一谷合戦」や「壇ノ浦合戦」等を素材とする演劇作品を研究対象とし、そこに語られる「歴史」観を形成するメカニズムの解明を試みる。延いては、日本文芸史における、軍記物演劇の位置付けを問い直すことを、目的とする。

３．研究の方法

本研究では、軍記物語と古典演劇のテキストの調査・分析が基本となるため、研究遂行の第一段階として、各作品の資料蒐集が必要である。加えて、中世・近世の軍記物語の評判記や名将伝・一代記といった巷間の史書等の調査・分析が必要である。

加えて、能や浄瑠璃には、未だ、テキストの公刊されていない作品や、信頼し得るテキストが提示されていない作品も多い。資料の調査・蒐集においては、こうした作品のテキストの翻刻・データの集積をし、論文や報告書に付載することを目指す。調査対象として計画した文献資料や作品等は以下の通りである。

(イ) 能楽関連資料の調査

「八島」「舟弁慶」「碇潜」「景清」等の「一の谷・屋島合戦」「壇ノ浦合戦」に取材した作品の室町～江戸時代初期の写本、及び江戸時代前期の版行本を調査し、テキストの翻刻・校合を行い、テキストの流布の様態を検討する。

(ロ) 幸若舞曲関連資料の調査

「八島」「四国落」「那須与一」「景清」等の「一の谷・屋島合戦」「壇ノ浦合戦」に取材した約 8 作品の室町末期の写本、及び江戸期の版行本を調査し、テキストの翻刻・校合を行い、関連する能楽作品とのテキストの比較を行う。

(ハ) 浄瑠璃関連資料の調査

「一の谷・屋島合戦」「壇ノ浦合戦」に取材した浄瑠璃作品のうち、主に江戸時代前期に成立した古浄瑠璃作品の正本の版行本を調査・翻刻し、各作品毎に、底本たるテキストの整定を行う。また、テキストの異同状況や、役表記や節譜の相違等を調査・分析し、データの集積を行う。

以上の諸資料・作品の調査、データ分析を経た上で、演劇作品資料以外の、評判記や史書といった諸資料の調査を行い、研究の総合、論文化を目指す。

４．研究成果

(1) 軍記と語り物研究会 2008 年 6 月企画例会「〈語り物〉の芸能と軍記」

本研究代表者が研究史を展望した「軍記物の『語り物』芸能（1997 年 1 月～2006 年 12 月）」（『軍記と語り物』44、2008 年 3 月）に基いて、当初計画していた口頭発表は行わなかったものの、コーディネーター兼司会者として、能楽・浄瑠璃の若手研究者と、室町後期～江戸中期の演劇における、軍記物語の受容について議論し、原典である軍記物語のテキストを離れた、中世・近世演劇における軍記物の様相や、演劇における演出や上演記録等から読み取る軍記物演劇史の可能性について、知見を得た。

(2) 近松門左衛門の初期軍記物浄瑠璃と謡曲との関わり

近世前期に近松門左衛門が、その浄瑠璃創作における初期段階で創った、軍記物の浄瑠璃『薩摩守忠度』と『千載集』とは、一部を除き、非常に類似した構成・本文を持つ作品である。『薩摩守忠度』は、竹本義太夫により、『千載集』は宇治加賀掾により語られていたが、現今の研究では、『千載集』は、『薩摩守忠度』を改作したもので、その改作には、浄瑠璃太夫である加賀掾が関与していると考えられている。

両浄瑠璃は、『平家物語』等に見える平忠度の都落ちや最期を素材とする作品であるが、『平家物語』本文よりは、中世に世阿弥が創った、謡曲『忠度』の影響を強く受けて創られている。従って本研究では、両浄瑠璃における謡曲の影響に注目し、浄瑠璃本文に

おける、謡曲本文の受容例を検討することから、近松の浄瑠璃創作の手法の一端を解明することを目的とした。

検討の結果、『薩摩守忠度』と『千載集』とでは、その第四段の本文を中心に、謡曲『忠度』をその浄瑠璃中に受容する手法をめぐって、対照的な相違が伺える。即ち、近松が『薩摩守忠度』において、謡曲『忠度』の本文を引用しつつも、謡曲の筋や展開にはとらわれない、自由かつ独自の創作を加えて、新たな作品を志向しているのに対して、加賀掾は、謡曲『忠度』において忠度霊が語る「いくさ語り」の形式等をはじめ、謡曲の本文や作品展開をもその浄瑠璃作品中に採り入れ、典拠たる謡曲に忠実であることを志向して、『千載集』という浄瑠璃に改作したと考えられるのである。

近世の浄瑠璃作品における謡曲の影響の大きさは屡々指摘されてはいるが、『薩摩守忠度』や『千載集』のような浄瑠璃作品は、近世前期の浄瑠璃作者や浄瑠璃太夫が、いかに謡曲を受容していたかを、具体的に分析する上では、恰好かつ重要な作品である。また、『平家物語』関連話が、中世の謡曲から、近世の浄瑠璃へと、どのように展開して行くのかを考察し、中世から近世にかけての軍記物の演劇作品の創作史・展開史を追究するためには、軍記物関連の謡曲作品や浄瑠璃作品の、更なる分析を行ってゆかねばならない。

(3) 源平盛衰記と中世・近世芸能―木曽義仲周辺の謡曲・浄瑠璃作品を例に

平家物語諸本には見えない源平盛衰記の独自記事、すなわち巻第二十六「木曾謀叛」「兼遠起請」に見える、幼少の木曽義仲を斎藤実盛が中原兼遠に託したとする件り、巻第三十「真盛被討」「朱買臣錦袴」「新豊県翁」に見える、義仲が手塚光盛に討たれた実盛を養父と慕って追悼する件りに注目し、実盛の登場する浄瑠璃作品が、盛衰記の記事に取材しながら、併せて世阿弥作の謡曲〈実盛〉の詞章の影響を受けて展開していることを確認した。

謡曲〈実盛〉の詞章は、流布本等に見える平家物語巻第七「実盛最期の事」の本文を多く引用するかたちで構成されているが、浄瑠璃作品への影響という観点では、

（イ） 実盛の霊が生前の実盛譚を相対化して語る、修羅能の形式であること

（ロ） 実盛首洗いの場面が、『和漢朗詠集』所載の「気霽風梳新流髪氷消波洗旧苔鬚」等の詩歌を引いて美化されていること

（ハ） 最後の戦さに義仲と組み討とうとしたところを手塚に阻まれたと、実盛の執心が創作されていること

以上の３点における世阿弥の創作性が注目される。

浄瑠璃では、源平盛衰記や謡曲〈実盛〉の影響を受けている作品として、寛文年間版行と考えられている古浄瑠璃『ともへ』等があり、享保期初演『加賀国篠原合戦』や延享期初演『軍法富士見西行』等の浄瑠璃では、義仲・実盛、義仲・兼遠の擬似的な恩愛関係、そこから派生した親子・男女の恩愛関係が、作品展開の中核となっている。

盛衰記の記事内容を踏まえず、流布本の実盛関連記事と謡曲〈実盛〉との影響が顕著である、宝永～正徳年間版行と考えられている『斎藤別当実盛』のごとき浄瑠璃もあるが、管見の限り、この浄瑠璃の影響を受けた浄瑠璃作品は他に見えない。盛衰記を踏まえた浄瑠璃作品の様相や、草双紙『実盛一代記』、浮世草子『実盛曲輪錦』、絵巻『木曾物語』、軍書『義仲勲功図会』等の近世文芸作品との関連、及びそれらの版行本等の挿絵に窺える特徴も考えあわせると、斎藤実盛関連話は、中世・近世芸能を通して、義仲の一代記の一端として展開して行ったと見てよいであろう。

(4)今後の課題

文献資料の調査・蒐集は、本研究代表者の所属移動等の事情が重なり、当初の計画を大幅に変更せざるを得なかったところがあった。資料の調査・蒐集の成果は、公刊した論文中に部分的に翻刻・引用するかたちにとどまった。年度内に資料収集や調査は終えたものの、未だ分析・考察中の検討課題も残されており、本課題研究終了後のはやいうちに論文化し、研究成果を公表する予定である。

近世演劇における「歴史」観をとらえるためには、例えば、浄瑠璃や歌舞伎の作者達が、いかなる「源平合戦に関する歴史」観を抱いていたかを、諸資料を勘案しつつ分析を重ねていく必要があり、そこには自ずと、近世演劇の作劇法における「世界」や「趣向」の問題も関わってくるはずである。近世演劇における「世界」の形成における、謡曲や軍記物語の影響についても、今後、分析を重ねて生きたい。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

① 岩城賢太郎、中世・近世芸能が語り伝えた斎藤実盛―謡曲と『源平盛衰記』を経て木曾義仲関連の浄瑠璃作品へ―、武蔵野大学能楽資料センター紀要、査読無、№22、2011、pp.15―40

② 岩城賢太郎、教室で能を取り上げる手掛

かりとして―成田美名子氏『花よりも花の如く』の紹介、大修館書店国語教室、査読無、92 号、2010、pp.54―57

③ 岩城賢太郎、近松門左衛門の初期時代物浄瑠璃と謡曲―浄瑠璃『薩摩守忠度』と『千載集』を通して、翰林日本学、査読無、第 13 輯、2008、pp.22―47

〔学会発表〕（計４件）

① 岩城賢太郎、中世・近世芸能が形成する武者像と近代の武者像と―斎藤実盛をモデルとして、さんごの会第７回例会報告会「近代日本における〈武〉の文化継承」、2010 年 9 月 26 日、早稲田大学

② 岩城賢太郎、源平盛衰記と中世・近世芸能―木曽義仲周辺の謡曲・浄瑠璃作品―、科研費共同研究「『文化現象としての源平盛衰記』研究」シンポジウム「源平盛衰記と芸能」、2010 年 9 月 8 日、國學院大學

③ 岩城賢太郎、謡曲と浄瑠璃の作品に見える「斎藤実盛」―中世・近世芸能が形成した「歴史」を追究するために―、法政大学能楽研究所若手研究会、2010 年 7 月 30 日、法政大学能楽研究所

④ 岩城賢太郎、中世・近世芸能が語り伝えた「斎藤実盛」―軍記物芸能が形成した「歴史」観を追跡するために―西日本第18回古典研究会、2009年9月20日、広島大学

６．研究組織

(1)研究代表者

岩城　賢太郎（IWAGI KENTARO）

武蔵野大学・文学部・日本文学文化学科・講師

研究者番号：４０４４２５０１

(2)研究分担者

（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：